

De toute façon の基本的機能

谷口 千賀子

0. はじめに

de (une) façon (manière) + adj. は事行の様態を表す構成素副詞として用いられるが、その形態の一つである *de toute façon (manière)*⁽¹⁾ (以下 DTF) は、Combettes (1994) によれば 19 世紀前半まで様態を示す機能を有していたものの、現代フランス語ではもっぱら連結辞のひとつとみなされている。

DTF の機能については、これまでの先行研究の中で、「再評価 (réévaluatif)⁽²⁾」, 「換言 (reformulatif)⁽³⁾」, 「終結 (conclusif)⁽⁴⁾」, 「完結 (clôture)⁽⁵⁾」などと説明されてきた。しかし川北 (2006) で指摘されているとおり、それぞれの先行研究の中で各研究者による分析過程⁽⁶⁾ が具体的に示されない傾向にあるため、我々はそれぞれの分析過程を推測することによってしか分析結果を検証できず、これまでの研究によって DTF の機能や使用条件が明らかになったとは必ずしも言い難い。そこで川北 (2009) では、分析過程を明示することによって DTF の機能を包括的に説明しようと試みている。

本稿では、川北 (2009) による DTF の機能分析を踏まえた上で、その問題点を指摘し、さらに幅広く DTF の使用例を観察することによって、より言語実態に合った DTF の機能を提示することを目指す。

まず 1 章で川北 (2009) による分析とその問題点を概観し、その後我々の考察をとおして (2 章)、最終的に我々が考える DTF の基本的機能を示したい。

1. 川北 (2009)

川北 (2009) は、DTF に関する先行研究が分析過程を提示してこなかったことを指摘した川北 (2006) を踏まえ、具体的な分析手順を示すことによって DTF の機能を明らかにしようとしている。

それによれば、「X (P). DTF Y (Q).」の形式においては、X の表意 P から導かれる推意 α と Y の表意 Q から導かれる推意 β が想定できるが、それぞれの推意が導かれる過程（経験則）を明示し、推意 α と推意 β 、表意 P と推意 β 、推意 α と表意 Q、表意 P と表意 Q の関係を検討することによって、DTF の使用を「 $\alpha = \beta$ 」型と「 $\alpha \neq \beta$ 」型とに分類している (pp. 2-3).

まず「 $\alpha = \beta$ 」型の次の例を見てみよう。

- (1) (画廊経営者であるフェレールのところに 10 年来面倒を見ている画家が新しい絵を携えてやってくる。フェレールはこの画家の絵の評判が悪いことを伝えるが画家は新しい絵を渡そうとする。) Tu sais que ça pose des problèmes, le peintre qui change tout le temps, les gens attendent un truc et puis ils sont déçus. Tu sais que tout est labélisé⁽⁷⁾, quand même, c'est plus facile pour moi de promouvoir quelque chose qui ne bouge pas trop, sinon c'est catastrophique. Tu sais bien que tout ça est très fragile. Enfin je te dis ça, c'est toi qui vois. *De toute façon*, celui-là je ne peux pas le prendre, je veux d'abord écouler le reste.

(J. Echenoz, 1999, *Je m'en vais*, pp. 43-44, in 川北, 2009, pp. 3-4)

P: 画家はフェレールの言わんとしていることがわかる⁽⁸⁾ (X = c'est toi qui vois).

α : 画家は持参した絵を持ち帰る (←経験則: 画家が画廊経営者によって指摘される売れない理由がわかれば、持参した絵を持ち帰る)。

Q: フェレールは画家の持参した絵を引き取ることが出来ない (Y = celui-là je ne peux pas le prendre).

β : 画家は持参した絵を持ち帰らざるを得ない (←経験則: 画廊経営者が画家の絵を拒否するならば、画家は絵を持ち帰らざるを得ない)。

① α と β の関係: 同一。

②P と β の関係：画家は自分の絵が売れないことがわかる。だから、画家は自分の絵を持ち帰る。

③ α と Q の関係：画家は持参した絵を持ち帰る。何故ならば、フェレールは画家の持参した絵を引き取ることが出来ないからである。

④P と Q の関係：「P \rightarrow α 」の因果関係（画家が話に納得したから絵を持ち帰る）より「Q \rightarrow β 」の因果関係（フェレールが絵を引き取ることができないから画家は絵を持ち帰る）の方が強い。

「画家は自分の絵が売れないということがわかる。だから、画家は持参した絵を持ち帰る。しかし、『画家が自分の絵が売れないということがわかるから、持参した絵を持ち帰る』ということではない。画家が持参した絵を持ち帰るのは、その理由として、フェレールが画家の持参した絵を引き取ることが出来ないからである。」

これらの分析過程により、「 $\alpha = \beta$ 」型の「X (P). DTF Y (Q).」は、

「まず、X (P) が明示される。だから α が推意として導かれる。しかし、『P だから α 』という因果関係は今回排除しても問題が生じないことがわかる。何故ならば、Y (Q) の場合には、 β が推意として導かれ、X (P) か X (P) でないかは $\alpha (= \beta)$ という結論に対しては同じことで重要でないからである。従って、Y (Q) が明示される。」

としている (pp. 3-18).

次に「 $\alpha \neq \beta$ 」型である。

- (2) (毎晩、夜 8 時半には彼女は寝に行き、父は出かける。8 時 45 分には、母の愛人がやってくる。) Tous les soirs, à neuf heures moins le quart, André vient. Il gare sa Jaguar, sa Porche, sa Cadillac, et il est là. Il ne sonne pas - les enfants dorment, leur maman *de toute façon* le guette à la fenêtre, elle actionne l'ouvre-porte, il monte quatre à quatre, il arrive, il est là. (C. Laurens, 2000, *Dans ces bras-là*, p. 44, in *ibid.* pp. 18-19)

P: 子供たちが眠っているからアンドレは呼び鈴を鳴らさない (X = Il ne sonne pas -

les enfants dorment).

α : アンドレは中に入れない (←経験則 : 呼び鈴を鳴らさないならば, 住人は来客に気づかない. だからドアが開かず, 中に入れない).

Q : 子供たちのお母さんは, アンドレを窓辺で待ち焦がれている (Y = leur maman de toute façon le guette à la fenêtre⁽⁹⁾).

β : アンドレは中に入れる (←経験則 : 誰かが見張っているならば, 来客に気づき, 来客は中に入れる).

① α と β の関係 : 対立.

②P と β の関係 : 子供たちが眠っているから, アンドレは呼び鈴を鳴らさない.

だから, アンドレは中に入れない. しかし, アンドレは中に入れる.

③ α と Q の関係 : アンドレは中に入れない. しかし, アンドレは中に入れる. 何故ならば, 子供たちのお母さんがアンドレを窓辺で待ち焦がれているから.

④P と Q の関係 : 「P \rightarrow α 」の因果関係 (呼び鈴を鳴らさないから中に入れない) より 「Q \rightarrow β 」の因果関係 (子供たちのお母さんがアンドレを窓辺で待ち焦がれているから中に入れる) の方が強い.

「子供たちが眠っているから, アンドレは呼び鈴を鳴らさない. だから, アンドレは中に入れない. しかし, 『アンドレは呼び鈴を鳴らさないから, 中に入れない』ということではない. アンドレは中に入れる. その理由として, 子供たちのお母さんが, アンドレを窓辺で待ち焦がれているから.」

この分析過程により, 上で見た「 $\alpha = \beta$ 」型の「X (P). DTF Y (Q).」に対する仮説を修正し, 最終的に以下のような DTF の機能を提示している (pp. 18-25).

「X (P) を明示することによって, α となることが一旦暗示されてしまう. しかし, DTF を用いることによって, 『X (P) だから α 』という因果関係を排除しても問題は生じないということを暗示し, その理由として Y (Q) を明示する. Y (Q) の明示によって最終結論 β が暗黙に理解される.」

このように、川北 (2009) は分析過程を明らかにすることによって、非常に明快な分析結果を得るに至っている。川北 (2009) が分析した 15 例がすべてこの「 $\alpha = \beta$ 」または「 $\alpha \neq \beta$ 」に分類できた⁽¹⁰⁾ということからも、上の分析結果が DTF の基本的機能から逸脱するものではないと考えられよう。

ところで川北 (2009) では、DTF の直前の発話 X (P) から導かれる推意 α と DTF を伴う Y (Q) から導かれる推意 β との関係に着目しているが、DTF は常にこの X (P) (およびそこから導かれる推意 α) と Y (Q) (およびそこから導かれる推意 β) のみの関係を示しているのだろうか。

また、上でも見たように川北 (2009) は、DTF は「X (P) ならば α 」という因果関係を排除しても問題は生じないことを暗示する」と述べているが、しかしながら川北 (2009) 自身、「X (P) ならば α 」という因果関係とならない例を例外として取り上げている。この DTF の例外的用法はどのように説明すれば良いのだろうか。

2. 問題点の検証

2.1. DTF が関係づけるのは X と Y か

DTF は直前の発話 X (P) (およびそこから導かれる推意 α) と DTF を伴う発話 Y (Q) (およびそこから導かれる推意 β) のみを結びつける連結辞なのだろうか。次の例を見てみよう。Pau からピレネー山脈への小旅行についての記述である。

- (3) Je me suis réduit à celle-ci [= une excursion], qui est la moins éloignée de Pau. Barèges et Cauterets sont beaucoup plus éloignés. D'ailleurs, je devais, *de toutes façons*, faire une grande partie du chemin pour voir une personne [...].
(J. Michelet, *Journal I*, p. 765, in Combettes, 1994, p. 58)

川北 (2009) のとおり、カンマあるいはピリオドによる区切りを 1 文とみなすならば⁽¹¹⁾、X は «Barèges et Cauterets sont beaucoup plus éloignés.», Y は «D'ailleurs, je devais faire une grande partie du chemin pour voir une personne [...].» となり、たとえば以下のように分析することができるだろう。

P: Barèges と Cauterets はより遠い。

α : 行かない (←経験則: 遠いなら行かない).

Q: ある人に会うのにその道のり (= celle-ci⁽¹²⁾) の大部分を充てねばならなかった
(= その道のりの大部分はある人に会いに行く道筋でもあった).

β : (celle-ci の目的地へ) 行く (←経験則: 人と会うためならば行く).

α と β の関係: 対立.

「Barèges と Cauterets は遠い. だから行かない. しかし Barèges と Cauterets が遠いから行かないという因果関係は排除しても問題ない. なぜならば, ある人物に会うのにその道のりの大部分を充てねばならなかった以上, Barèges や Cauterets が遠いか遠くないかは (celle-ci の目的地へ) 行くという結論に対しては同じことで重要ではない.」

しかし, この例 (3) を読んで直感的に理解する内容と, この解釈は果たして一致しているだろうか. この DTF は, Combettes (1994) によれば, 「文脈の中で示される可能性 (une excursion / une autre excursion)」と大きく関わっていると言う (p. 59).

この例における «je» は «celle-ci» によって示される小旅行を選択しているが, それはまず第一に «la moins éloignée de Pau» という理由による. Barèges も Cauterets も celle-ci も Pau から遠いが, その中で「もっとも遠くない」のが celle-ci であり, 「どこに行くにしても遠いが, もっとも遠くないので celle-ci を選んだ」わけである. しかしながら, 「遠いから行かない (= Barèges, Cauterets)」「遠くないから行く (=celle-ci)」という因果関係による選択が, DTF によって導入されるもうひとつの理由 «je devais faire une grande partie du chemin pour voir une personne» と, そこから導かれる推意「人と会うためならば行く」によって無効とされている. つまり, 「遠くないから celle-ci の目的地に行く, 遠いから Barèges, Cauterets に行かない」という選択は排除しても問題ない. なぜならば, その道のりの大部分がある人に会いに行く道筋でもあった以上, (celle-ci に) 行くという結論に対しては同じことで重要ではない.」という解釈がより自然であろうと思われる.

次も DTF が文中に明示される選択肢と関わっていることが顕著であると思われる例である.

(4) Ancien caviste lyonnais, il ne possède de la vigne ici que depuis une dizaine

d'années, mais a déjà un credo sur le sujet. "Que ce soit pour du sec ou du moelleux, je récolte *de toute façon* très tardivement. [...]" (*Le Monde*, le 19.08.1998)

この例における X は «Que ce soit pour du sec ou du moelleux,», Y は «je récolte très tardivement.» であるが, X の表意 P「辛口ワイン用であろうと甘口ワイン用であろうと」からなんらかの推意 α を想定してその推意 α が Y の表意 Q「ブドウを遅く摘む」から導かれる推意「良いワインができる」によって無効とされていると捉えるのはやや無理があるように思われる. ここでは, 「辛口ワイン用」「甘口ワイン用」それぞれの製法という選択（およびそこから導かれる推意「なんらかの製法があるなら良いワインができる」）自体が, DTF によって導入される Y «je récolte très tardivement» とその推意「良いワインができる」によって無効とされる, つまり, 「辛口ワイン用の製法だから良いワインができる, 甘口ワイン用の製法だから良いワインができるという選択は問題ではない. なぜならば, ブドウを遅く摘む以上, 良いワインができるという結論に対しては同じことで重要ではない。」と解釈するほうが, より自然であろう.

さらに次の例を見てみよう.

- (5) （脳のない状態で生まれてきた子供の親へのインタビュー）Mais faudra-t-il attendre qu'il meure ou faudra-t-il le débrancher ? Le don d'organes répond à des critères bien précis : encéphalogramme plat, absence de respiration et manque total de réflexe. "*De toute façon*, a expliqué le père, nous sommes contents parce que nous aurons un endroit où nous pourrions pleurer notre fils. Si Sandra avait avorté, cet endroit n'aurait pas pu exister." (*Le Monde*, le 30. 01.1998)

この例における X は «Le don d'organes répond à des critères bien précis : encéphalogramme plat, absence de respiration et manque total de réflexe.» であり, その表意「臓器提供については明確ないくつかの基準, 動きのない脳波図, 無呼吸, 反射神経の完全な欠如, を満たしている。」から, 「臓器提供できる（←経験則: 脳波も呼吸も反射も認められないなら脳死とみなされるので, 臓器提供する）。」という推意を導く

ことができよう。また、Y は «nous sommes contents parce que nous aurons un endroit où nous pourrions pleurer notre fils.» であり、その表意「我々には息子のために泣くことのできる場所があるから満足だ。」から、「息子が死んでもただ悲しいだけではない（←経験則：子供がないことに比べれば、子供のことを思って泣くことができるだけましである）。」という推意を読みとることができるだろう。以上を踏まえてこれまでと同様にこの例を解釈すると「臓器提供についてはいくつかの明確な基準、動きのない脳波図、無呼吸、反射神経の完全な欠如、を満たしている。だから臓器提供できる。しかし、臓器提供について明確ないくつかの基準を満たしているから臓器提供できるという因果関係を排除しても問題ない。なぜならば、我々には息子のために泣くことのできる場所がある以上、臓器提供についていくつかの明確な基準を満たしているかどうかは息子が死んでもただ悲しいだけではないという結論に対しては同じことで重要ではない。」と、かなり不自然になってしまう。この例における DTF は、直前の発話 X と関わっているのではなく、X より前に示されている «Mais faudra-t-il attendre qu'il meure ou faudra-t-il le débrancher ?» とつながっているとみなすべきではないだろうか。「息子が死ぬのを待つべきか」、「生命維持装置を外すべきか」という選択（およびそこから導かれる推意「（自然死によって、装置を外すことによって）息子を失うならば悲しい」）が、Y «nous sommes contents parce que nous aurons un endroit où nous pourrions pleurer notre fils.» とその推意「息子が死んでもただ悲しいだけではない」によって無効とされることを示しており、「息子が死ぬのを待つべきか（だから息子が死ぬことで悲しむ）、生命維持装置を外すべきか（だから息子が死ぬことで悲しむ）」という選択は問題ではない。なぜならば、我々には息子のために泣くことのできる場所がある以上、息子が死んでもただ悲しいだけではないという結論に対しては同じことで重要ではない。」と解釈すべきであろう。

ところで、先行文脈中に認められるある選択肢について、DTF を用いることにより、その選択自体が無効になることについては、Schelling (1982) でも次の例を挙げて指摘されている。

- (6) J'ai été à la montagne avec Pierrot, dimanche il a neigé toute la journée, *de toute*

façon j'aurais mieux fait de rester à la maison. (Schelling, 1982, p. 97)

Schelling (1982) は、この例では、2つの情報 «J'ai été à la montagne avec Pierrot», «dimanche il a neigé toute la journée» に伴う矛盾する推意が存在するが⁽¹³⁾, DTF はその矛盾する推意の選択自体を不適切だとする、という (p. 97). 川北 (2009) によれば、川北 (2009) が検証したコーパスの中で、先行談話内にそのような矛盾する論理的流れがあるような例文は見出されなかった (p. 28), とのことであるが, DTF の用例を観察すると、先行文脈内に、明示されずともなんらかの選択肢が想定できることは多い。たとえば上で見た例 (2) でも、「呼び鈴を鳴らさない」に対して「呼び鈴を鳴らす」が存在する。先行文脈中に矛盾する推意の存在があるかどうかはさらに検証が必要であろうが、明示的であれ、非明示的であれ、DTF の先行文脈中に存在する選択肢の中からいずれかを選択すること自体が無効であるという点については、Schelling (1982) の主張も我々の見方と矛盾しないように思われる。

以上のことから、DTF の機能について次の2つのことが言えるだろう。

まず、例 (5) で見たとおり、DTF に導かれる Y(Q) (およびその推意 β) は、DTF の直前の発話 X (P) (およびその推意 α) のみとつながっているのではない。DTF は、Y (Q) (およびその推意 β) の内容と矛盾しない要素を先行文脈の中に逡巡的に探すことを認める連結辞である。

また、DTF は先行する文脈の中で明示的、非明示的に示された選択肢を受け、Y (Q) (およびその推意 β) という結論を示すことによって、その選択肢の中からいずれかを選ぶこと自体が無効であることを暗示する機能を持つと考えられる。

2.2. DTF が無効とするもの

上で見たように、DTF は直前の発話 X (P) とその推意 α だけを無効の対象とするのではなく、DTF に先行する文脈の中の適当な要素が無効の対象となる。Yahia (2002) によれば、次の例では、

- (7) L'animatrice s'adressant au candidat éliminé : «Eh ben voilà, fin de la première étape. Et à la fin de cette première étape, quelqu'un doit partir. Eh ben, après Michael, c'est le retour, ça va être Michael c'est le départ. Sans regrets ?»

Le candidat : «Non, non, c'était très bien.»

L'animatrice : «Ben, vous restez avec nous, *de toute façon*. Je vous embrasse.»

(Extrait de l'émission *Légal ou pas légal*, La 5, le 06. 08. 2000, in Yahia, 2002, p. 74)

DTF は司会者による質問 «Sans regrets ?» とそれに対する返答 «Non, non, c'était très bien.» の両方にかかっており、「ゲームを去ることを後悔しているかどうかを明らかにすることは何の意味もない。なぜならば本当にその場を去るわけではないからである」と解釈できるという (p. 74). Yahia (2002) は, «Sans regrets ?» からは「スタジオを去らなければならないなら, 後悔があるだろう」という推意を導くことができるが, «vous restez avec nous» と発言することによって「(本当にその場を立ち去るわけではないので) 後悔することはない」と, 最初の推意を無効にしていると述べている。その際, 司会者にとって相手がどのように返事をするかはどうでもよいという。つまり, 相手が「後悔がある」と答えても, 「ない」と答えても, その返事さえもが「(本当にその場を立ち去るわけではないので) 後悔することはない」と無効とされていると考えられよう。「Sans regrets ?」に対して «Non, non, c'était très bien.» と答える一連のやり取り自体, つまり先行文脈中に現れる論理的流れ自体を無効にしていると捉えられるのではないだろうか。

次の例は, 「P だから α 」という因果関係を取らないものとして, 川北 (2009) で例外扱いされている例である。ここでの X «Bien sûr,» の表意「もちろん (覚えている)」と, 推意 α 「(覚えているのは) 黄色いという特徴があるからである」は「 α だから P」という関係である。

- (8) Il arriva, serra les mains en s'exclamant comme il se trouvait bien du Martinov acheté en début d'année, vous vous souvenez, le grand Martinov jaune. Bien sûr, dit Ferrer. Ils sont tous plus ou moins jaunes *de toute façon*. Et vous avez de nouvelles pièces, depuis ? s'inquiéta l'homme d'affaires. (J. Echenoz, 1999, *Je m'en vais*, pp. 180-181, in 川北, 2009, p. 20)

この例を川北 (2009) は「あなたの買った絵をもちろん覚えている。何故ならば, その絵は黄色いという特徴があるから。いや『黄色いという特徴があるから覚えて

いる』という因果関係は今回排除しても問題はない。何故ならば、マルチノフの絵は全ておおむね黄色い以上、覚えているのは（黄色いという特徴があるからではなく、）私が画廊経営者だからであるので、黄色いという特徴があってもなくても、どちらの場合であっても、覚えているという結論に対しては、同じことで重要ではない。」と解釈している (p. 26)。ここでの表意 P「もちろん（覚えている）」から導かれる推意「黄色いという特徴があるからである」は、当然のことながら、表意「もちろん」からのみによって導かれるものではない。《vous vous souvenez, le grand Martinov jaune.》に対する返答として《Bien sûr.》があるからこそ、「黄色いという特徴があるから（覚えている）」という推意の特定が可能となる。「大きくて黄色いマルチノフを覚えているか」という問いに対して《Bien sûr.》と答えるということは、川北 (2009) によっても分析されているように、黄色いことが絵の特徴であり、自分（客）の買った絵は黄色いので、その黄色いという特徴によってフェレルがその絵を覚えていると客が理解するということであるが、この客による理解に至る論理的流れを《Ils sont tous plus ou moins jaunes.》と発言することによって無効にしていると見るべきではないだろうか。

3. おわりに

以上のとおり、川北 (2009) によって提示された DTF の機能に対する問題点を挙げ、さらなる DTF の用例観察の結果、以下のことがわかった。

- 1) DTF は、DTF の直前の発話 X (P)（およびその推意 α ）のみを無効とするのではなく、DTF によって導かれる Y (Q)（およびその推意 β ）が示す内容と矛盾しない要素を遡及的に先行文脈内に求める。
- 2) DTF は先行する文脈の中に明示的、非明示的に示される選択肢について、その選択自体を無効とする機能を持つ。
- 3) DTF が無効とするのは、先行文脈中に存在する明示的、非明示的選択肢（およびそこから導かれる推意）、発話 X (P)（およびそこから導かれる推意）、論理的流れ（およびそこから導かれる推意）である。

特に 2) については、川北 (2009) が分析した例文の解釈の際に、そしてまた我々も、しばしば「X (P) であろうと X (P) でなかろうと」と、無意識のうちに選択肢を提示していることや、上で見た Schelling (1982) の主張など⁽¹⁴⁾を考慮すると、DTF に先行する文脈の中になんらかの選択肢の存在があることが DTF 使用の際の大きな特徴の一つではないかと考えられる。

また、DTF を使用することによって無効とされる要素も、直前の発話 X (およびその推意 α) に限らず、先行する文脈全体を対象とすることは、谷口 (2009) で見たように、DTF が「先行する文脈の中に存在する可能性を網羅的に想定済み、あるいは想定したことにするを示すマーカーである」という主張とも矛盾しない。

以上のことから、DTF は、「Y (Q) を提示することによって、先行する文脈中に Y (Q) と矛盾しない要素を求め、その要素 (およびそこから導かれる推意) を無効とし、Y (Q) から導かれる推意 β を結論として暗示する」マーカーであると定義できよう。

この定義はまだ仮説の域を出ず、さらに多くの用例を検討することでこの定義の妥当性を確認する必要がある。また、他の連結辞との共起や文中での DTF の位置の問題などは、今後の課題としたい。

注

- (1) *de toute(s) façon(s)* と *de toute(s) manière(s)* が存在するが, Roulet (1987) ではこの 2 つを、意味変化なしに入れ替え可能であることから同義語とみなしており (p. 121), Grieve (1996) も両者をほぼ等価なものとみなしていることから、本稿でも同義語として扱うこととする。また、単数形・複数形の別についても、Grevisse (1988) では、どちらも可能 (ただし単数形のほうが優勢) であるとしている (§ 615, *remarque*) ことから、本稿では問題としない。
- (2) cf. Schelling (1992, 1995) など。
- (3) cf. Roulet (1987), Rossari (1999), Yahia (2002) など。
- (4) cf. Schelling (1982), Kahloul (2004) など。

- (5) cf. Kahloul (2004).
- (6) 分析で用いられた例文の解釈, その解釈に至った理由のこと (cf. 川北, 2006, p. 1).
- (7) 川北 (2009) では *labélise* となっているが, 出典のとおり改めた.
- (8) 川北 (2009) によるこの解釈は誤りで, 正しくは「(自分はこういうことばを口にしていくが) どのようにするか判断するのは君だ」という意味であると考えられる. したがってこの例についての以下の分析も異なる可能性があるが, ここでは川北 (2009) による記述のまま引用する.
- (9) 厳密には, $Y = \text{leur maman le guette à la fenêtre}$ であろう.
- (10) 15 例中 12 例が「 $\alpha = \beta$ 」型, 3 例が「 $\alpha \neq \beta$ 」型 (cf. 川北, 2009, p. 3).
- (11) cf. 川北, 2009, p. 31, 注 6).
- (12) *Eaux-bonnes* に行くこと (cf. J. Michelet, *Journal I*, p. 765).
- (13) その推意が何なのかについては, 川北 (2006) でも批判されているように (pp. 2-3) 示されていないので厳密にはわからない.
- (14) その他, Rossari (1999) による「X, Y が共通の結論 C を有するとき, X を - X に置き換えても共通の結論 C が変わらなければ, DTF の使用は適切である (p. 185)」という主張.

参考文献

- COMBETTES, B. (1994), “Une approche diachronique des connecteurs et des modalisateurs”, *Pratiques* 84, 55-67.
- GREVISSE, M. (1988), *Le bon usage*, 12^e édition, Duculot.
- GRIEVE, J. (1996), *Dictionary of Contemporary French Connectors*, Routledge.
- KAHLOUL, M. (2004), “*Tout compte fait, de toute façon : connecteurs conclusifs et / ou clôture ?*”, *Revue de sémantique et pragmatique* 15/16, 235-252.
- ROSSARI, C. (1999), “Les relations de discours avec ou sans connecteurs”, *Cahiers de linguistique française* 21, 181-192.
- ROULET, E. et al. (1985), *L'articulation du discours en français contemporain*, Peter Lang.
- ROULET, E. (1987), “Complétude interactive et connecteurs reformulatifs”, *Cahiers de linguistique française* 8, 111-140.
- SCHELLING, M. (1982), “Quelques modalités de clôture, les conclusifs : *FINALEMENT, EN SOMME, AU FOND, DE TOUTE FAÇON*”, *Cahiers de linguistique française* 4, 63-106.
- SCHELLING, M. (1985), “Les connecteurs réévaluatifs”, E. ROULET et al. (eds) *L'articulation du*

discours en français contemporain, Peter Lang, 154-182.

YAHIA, F. (2002), “*De toute façon* : usages discursifs et valeurs pragmatiques”, *LINX* 46, 69-79.

川北 恭子 (2006) 「Connecteur の機能解明のための方法論上の問題点 (2) —de toute façon の分析を通じて—」『*études françaises*』38 (大阪外国語大学フランス語研究室), 1-21.

川北 恭子 (2009) 「De toute façon の機能分析」『*études françaises*』40 (大阪大学外国語学部フランス語研究室), 1-33.

谷口 千賀子 (2009) 「連結辞 *de toute façon*」『年報・フランス研究』43 (関西学院大学フランス学会), 67-79.

(文学部非常勤講師)